

令和7年度第2回 横浜市創造界限形成推進委員会会議録	
日 時	令和7年8月22日（金）15時00分～17時00分
開催場所	横浜市役所 18階 なみき15会議室
出席者	岡部委員長、木村委員、宮尾委員、山家委員、六川委員
欠席者	恵志委員
オブザーバー	恵良氏、鈴木氏
運営事業者	竹中工務店 鍵野氏、竹内氏
開催形態	非公開
議 題	<p>1 創造界限拠点の事業評価</p> <p>（1）令和7年度の事業評価について</p> <p>（2）創造界限形成推進委員会での担当制及び情報共有について</p> <p>（3）創造界限形成事業の成果指標について</p> <p>2 報告事項</p> <p>（1）星川行政区画運営事業者の決定について</p> <p>（2）象の鼻テラスの公募スケジュールについて</p>
決定事項	
黒澤課長	<p>【開会】</p> <p>○令和7年度第2回横浜市創造界限形成推進委員会を開催する。司会は創造都市推進課長黒澤である。開会にあたり、文化芸術創造都市推進部長岡より挨拶を行う。</p>
岡部長	<p>【部長挨拶】</p> <p>○文化芸術創造都市推進部長の岡である。本委員会は本年度第2回であり、私は今年度から着任した。第1回（5月30日）にも出席し、委員がそれぞれ担当を持ち、前向きに議論していることを心強く感じた。本日は、前回議論された担当制や情報共有の整理を行い、提案を行う。また、創造界限拠点の事業目標（KPI）について、前回の議論を踏まえ、試行案を説明する。</p> <p>さらに、各拠点の進捗について報告する。旧第一銀行は10月にオープン予定であり、BankPark YOKOHAMAの今年度事業計画を説明する。象の鼻地区は来年度新たな展開を迎えるため、その進め方を共有する。加えて、星川高架下の地域展開について、分科会で事業者が決定したため、提案と報告を行う。</p> <p>以上を踏まえ、本日の議論を進める。</p>
黒澤課長	<p>【資料確認】</p> <p>○配布資料の確認を行う。</p> <p>（資料確認）</p>
黒澤課長	<p>【定足数の確認】</p> <p>○定足数を確認する。委員6名中4名が出席しており、オンライン参加は木村委員のみ、恵志委員は欠席である。宮尾委員は15分遅れでオン</p>

		<p>ライン参加予定である。委員会運営要項第6条第3項に基づき、委員総数の半数以上の出席があるため、本会は成立している。</p> <p>本日のオブザーバーは、横浜市芸術文化振興財団専務理事の恵良氏、および鈴木氏である。議題（1）の説明者として、BankPark YOKOHAMA運営事業者である竹中工務店の鍵野氏および竹内氏が参加している。</p> <p>【会議の非公開の確認】</p> <p>○本会議の公開・非公開について確認する。横浜市情報公開条例第31条により、審議会等の会議は原則公開であるが、例外が認められている。本日の議題1（1）および議題2には、同条例第7条第2項に規定する非開示情報が含まれるため、当該項目は非公開とすることを提案する。委員の意見を求める。</p> <p style="text-align: center;">（了承）</p>
	黒澤課長	<p>【進行】</p> <p>○ここからの進行は岡部委員長に委ねる。</p> <p>議題1：創造界限拠点の事業評価</p> <p>「（1）令和7年度事業評価」について審議された。（非公開） （鍵野氏、竹内氏退室）</p>
	岡部委員長 森	<p>議題1（2）：創造界限形成推進委員会での担当制及び情報共有について</p> <p>○続いて議題1（2）に移る。創造界限形成推進委員会での情報共有について、事務局から説明を求める。</p> <p>○創造界限形成推進委員会での担当制および情報共有について説明する。昨年度までは、事務局が各拠点から情報を集約し、月1回メールで配信していた。今年度からは、LINE WORKSを活用し、各拠点がリアルタイムで情報を共有できる仕組みに変更する。これにより、全委員が即時に情報を把握できる。</p> <p>LINE WORKSの運用方法とルールは8月1日にメールで案内済みである。メンバーは委員6名、オブザーバー2名、各拠点2名、事務局を含め約10名で構成する。投稿はテンプレートを使用し、情報の統一性を確保する。委員からの情報提供や拠点への相談にも活用できる。</p> <p>この仕組みにより、従来の主担当・副担当の役割を見直し、基本的には主担当が対応する。ただし、全委員が情報を共有するため、副担当に限定せず意見を出せる。主担当の業務は、担当拠点の視察、ヒアリング、助言、中間振り返りや事業評価への助言である。副担当は主担当が対応できない場合の代替とする。</p>

	<p>岡部委員長 木村委員</p> <p>森</p> <p>木村委員 岡部委員長</p> <p>森</p> <p>岡部委員長 六川委員</p> <p>岡部委員長 六川委員</p> <p>森</p> <p>森</p>	<p>今年度から12月の第3回委員会で中間振り返りを実施する。10月に拠点 が中間報告資料を準備し、11月に主担当と拠点、事務局で意見交換 を行う。12月の委員会では、事務局が拠点の状況を報告し、主担当が 意見を補足、他の委員も意見を述べる。委員会後、事務局が拠点にフ ィードバックを行い、必要に応じて主担当が直接対応する。 説明は以上である。</p> <p>○この件について、質問または意見を求める。</p> <p>○質問である。10月および11月に予定されている拠点別の主担当・副担 当との意見交換について、その進め方はメールをベースとするのか、 それとも対面や別の方法を想定しているのか確認したい。</p> <p>○年間スケジュールの一番下に「市・各拠点中間振り返り」とあり、そ の吹き出しに「担当委員と議論」と記載しているが、これは拠点に訪 問して実施することを想定している。ただし、委員の都合により訪問 が難しい場合はオンラインでの実施も検討する。メールではなく、直 接対話による報告と意見交換を行う方針である。</p> <p>○承知した。</p> <p>○中間振り返りを実施し、その後、年度末に最終評価を行うという理 解でよいか。</p> <p>○そのとおりである。ただし、年度末は仮評価となる。3月時点では事 業がすべて終了していないため、3月の第4回委員会で「事業評価仮確 定」を行い、その結果を踏まえて次年度の事業計画を策定する。最終 的な確定は翌年度の第1回委員会で行う。</p> <p>○ほか質問等はあるか。</p> <p>○今回の仕組みは非常に良い方向に進んでいると感じる。従来は運営 事業者にとって資料作成の負担が大きかったが、今回はその負担が 大幅に軽減されている。その分、事業者は事業そのものに集中でき ようになると考える。</p> <p>○今までも資料作成はあったか。</p> <p>○資料作成には手間がかかるため、簡素化すべきであるという意見が 以前から出ていた。今回、異なる方向からの取り組みが始まったこと は好ましいと考える。</p> <p>○現在、LINE WORKSはテスト期間中であり、私からテスト送信を行っ ている。新規参加者が増えるたびに送信している状況である。既存の LINE WORKS利用者は、アカウントの切替えを行わないと通知を確認 できず、既読にならない場合がある。拠点を含め、既読になっていな い方が数名いるため、操作方法等に不明点がある場合は、私まで連絡 いただきたい。一緒に対応する。</p> <p>○新しいシステムであるため、使用中に意見があれば、委員会の場に 限らず事務局へいただきたい。改善の参考とする。</p>
--	---	---

<p>六川委員 森 岡部委員長</p>	<p>○何人つながっているか。 ○今は23人。 ○本件については了承とする。</p>
<p>岡部委員長 黒澤課長</p>	<p>議題1 (3) : 創造界限形成事業の成果指標について</p> <p>○では、議題1 (3) : 創造界限形成事業の成果指標について、事務局から説明を求める。</p> <p>○資料5をご覧いただきたい。2ページ目には前回委員会で説明した案を添付している。主な意見として、ロジックモデルに市民や拠点に加え『アーティスト』や『クリエイター』の視点を加えるべきとの指摘があった。創造的な人材という枠を設けることで、郊外展開における拠点選定の理由が明確になる。また、不動産オーナー、地主、金融機関など地域で創造的な取組を行う人々も対象に含めるべきであり、創造都市の全体像を描く上で重要であるとの意見をいただいた。</p> <p>これらを踏まえ、事務局ではロジックモデルとアウトカム指標を見直した。従来は市民来街者と拠点を対象としていたが、新たに『創造的活動をする人』を加え、KPIも再設定した。追加した指標は黄色で示しており、活動欄には『創造的活動（創造界限拠点+市との連携が深い民設拠点）』を追加した。これは事業評価のため、調査可能な拠点範囲を設定する変更である。</p> <p>活動対象は、市民来街者、創造界限拠点、民設民営拠点、創造的活動をする人である。アウトカム指標では、地域コミュニティと地域経済の活性化を重視し、最終アウトカムとして『創造性の社会実装が市内で拡大している』『国内外で活躍する人材が増加している』を追加した。短期アウトカムには『グリーン社会実現に向けた取組』『創造的活動をする人同士や他者との交流増加』『地域特性や課題に即した活動』『創造性の高い取組や作品の制作・発表』を設定した。中期アウトカムでは『地域特性や課題に即した活動の増加』『取組や作品、関係者に対する評価の向上』を掲げている。</p> <p>KPIは19項目で、そのうち12項目は客観的調査で数値化可能である。例えば、市民来街者に関する短期アウトカム『創造的活動への興味・関心のすそ野拡大』は、『創造界限拠点の市内認知率』『訪問意向率』をKPIとし、市の調査に追加して測定する。来場者数などは各拠点に集計を依頼する。⑧では『創造的活動の展開による持続的なにぎわい創出』を掲げ、『総来場者に占める初来場者割合』『民設民営拠点数』『民間企業と連携した事業数』をKPIとする。民設拠点数は市の調査で把握予定だが、方法は検討中である。⑩、⑫もヒアリングで把握予定だが、対象拠点や調査手法は今後検討する。</p> <p>最後のページには、各KPIの測定方法とねらいを記載した表を示して</p>

	<p>岡部委員長 恵良</p>	<p>いる。以上で説明を終える。</p> <p>○この件について、質問または意見を求める。</p> <p>○非常に良い方向で議論がまとまってきていると感じている。</p> <p>2点申し上げたい。まず1点目は、本制度が長期的に運用されることを前提とするならば、あまり固定的に捉えすぎず、時代の変化に応じて柔軟に対応できる仕組みが必要である。今後、データが蓄積されることで新たな価値や重要な要素が見えてくる可能性があるため、それらを取り込める柔軟性を制度設計の中に持たせるべきである。行政は人の異動が多く、継続性の確保が難しい面もあるため、制度として時代に応じる姿勢を明確にしておくことが重要である。</p> <p>例えば、近年ではNbS (Nature-based Solutions) や共生社会といった新しい概念が急速に広がっている。こうした動向にも対応できるような制度的な柔軟性を持つことが望ましい。</p> <p>2点目は、アウトカムの伝え方についてである。短期・中期のアウトカムは重要であるが、将来的な視点から見たとき、ステークホルダーや政策決定者に対して効果的に訴求するためには、総合的なアウトカムの整理が必要である。12項目すべてを丁寧の説明するのは現実的ではなく、3～4項目程度に絞って伝える方が効果的である。</p> <p>例えば、地域の活性化という観点では、新しい祭りの創出や既存の祭りの再活性化なども重要な成果である。また、にぎわいの中での経済効果や、実験的な取組による新たな価値の創出も評価すべきである。さらに、障がいのある方々の社会参加が促進された事例など、福祉的な側面での成果も含めるべきである。</p> <p>このような視点は、ステークホルダーに対して分かりやすく、共感を得やすいものであり、市民の認知向上にも寄与する。数値化が難しい項目も含めて、説明の切り口として整理しておくことで、限られた時間の中でも効果的な説明が可能となる。</p> <p>加えて、行政の各専門領域との連携が進むことで、政策への市民の関心が高まり、相乗効果が期待できる。これは長期的な視点に基づくものであり、制度運用においても意識しておくべきである。</p> <p>以上、私からの意見である。</p>
	<p>岡部長</p>	<p>○柔軟性についてのご指摘は、まさにそのとおりであると考えている。今回設定した指標のみで将来にわたって対応できるとは限らず、まずは「トライ」として発射台を把握することが重要である。現時点では比較の基準がないため、まずは一度始めてみる中で、より適した指標が見えてくる可能性がある。逆に、取得しても意味が薄い指標があることも想定されるため、今後の運用においては柔軟に対応していきたい。</p> <p>また、政策に訴えかけるような指標の設定については、非常に難し</p>

		<p>い面がある。因果関係の特定が困難であり、他の要因の影響も受けやすいため、単純に数値で示すことができない場合も多い。ただし、課題としての認識は持っており、今後さらに検討を重ねていきたいと考えている。</p>
	岡部長	<p>○今後、少しスタディを行いながら、「このような形ではどうか」といった検討を進めていきたいと考えている。</p>
	恵良	<p>○まずは、しっかりと構築することが必要である。</p>
	岡部長	<p>○今回の提案は、発射台としての位置づけであり、この内容をもとに議論を重ねて提案しているものである。</p>
	岡部委員長	<p>○私からも一言申し上げたい。事前に資料を拝見した際に感じたことであるが、「グリーン社会実現」という項目について、内容自体は決して悪いものではない。しかしながら、非常に細部に踏み込んだテーマが単独で取り上げられている印象を受け、やや特異な位置づけに見えた。</p> <p>一方で、「教育」「福祉」「産業」などの異分野との連携については複数の分野を包括的に捉えており、まとまりがある。今回の「グリーン社会実現」は、星川や旧第一銀行などの事例に基づいて取り上げられていることは理解しているが、創造都市全体の見え方としては、焦点がぼやけてしまうのではないかという懸念がある。</p> <p>今後、同様のテーマが追加されていくことを考えると、制度全体が「何でもあり」のような印象を与えかねない。もちろん、グリーン社会の視点は重要であるが、創造都市という枠組みの中で、どのような切り口で取り上げるべきかについては慎重に検討する必要があると感じた。</p>
	山家委員	<p>○私も委員長の意見に賛同するが、都市美対策審議会などでも同様の話題が挙がることもあり、横浜市全体の方向性としても自然な流れであると感じている。グリーン社会という言葉が唐突に見える面はあるが、環境配慮やサーキュラーエコノミーといった新しい視点として重要である。</p>
	山家委員	<p>○環境配慮という意味か。</p>
	岡部委員長	<p>○そうですね。</p>
	岡部長	<p>○サーキュラーエコノミーのようなイメージ。</p>
	山家委員	<p>○現在の社会においては、生活を含めたあらゆる領域で環境配慮が基盤的な価値として求められていると認識している。</p>
	岡部委員長	<p>○現在の社会では、環境配慮が生活の基盤として求められているとの認識を持っている。「グリーン社会」という表現が単独で目立つ形ではなく、包括的な書き方であれば違和感は少ないと感じた。</p>
	黒澤課長	<p>○いただいた意見を踏まえ、修正案として「教育、福祉、産業などの異分野との連携」に「環境」という語を加えることを検討したい。これ</p>

	六川委員	<p>まで「グリーン社会」は個別に取り上げていたが、今後は異分野の一つとして包括的に扱うことで、より自然な構成になると考える。</p> <p>○約20年前に始まった「クリエイティブシティ・ヨコハマ」の原点を忘れてはならない。環境の変化により様々な要素が加わっていくが、根幹にはクリエイターの自由で創造的な活動があるべきである。ロジックモデルの構築は重要であるが、枠にはめすぎることによって柔軟性が失われる懸念がある。創造的な人々が拠点で自由に活動できる環境を整えることが、横浜市の本来の姿であると考えている。</p>
	岡部委員長	<p>○私も賛同する。異分野や異なるジャンルが組み合わせることで、新たなクリエイティブな取組が生まれる点は、現在の2つの方向性にも通じるものである。</p>
	六川委員	<p>○ロジックモデルの整備は重要であるが、同時に自由な活動ができるような環境づくりも必要であると考えている。</p>
	宮尾委員	<p>○このページに記載された測定方法については、前回の会議体から多くの検討がなされ、内容が明確になってきたと感じている。ただし、今後の議論として重要なのは、どの程度の結果をもって評価とするかという点であり、これは今後決定していく必要がある。</p> <p>初期の評価では「現在地を知る」ことが目的となり、次回以降の評価では、どれだけ変化したかという変化の度合いによって結果を測定することになると考えている。測定方法の基準や評価のラインについて、どのように考えているか伺いたい。</p>
	黒澤課長	<p>○特に新たに設定した⑪や⑫の指標については、現時点でスタート地点の数値が把握できていないのが実情である。まずは初回の調査で基準値を確定し、中期（3～5年）の期間における数値の変化を見ながら、評価の方法を検討していきたい。初回の調査結果を踏まえ、2回目以降の動向によって評価を行う形になると考えている。</p>
	宮尾委員 恵良	<p>○理解した。</p> <p>○六川氏の発言に関連して、人や活動だけでなく、場や機会の広がりも重要な要素であると感じた。公共空間の活用や、ランドマーク、学校など地域で認知されている場所の使い方が広がることで、活動の温度差や意味が生まれる可能性がある。場所の持つ意味は大きく、駅に近いなどの条件も含め、場の拡充が人の集まりや表現の機会につながるかと考える。</p>
	岡部委員長 恵良	<p>○以前は遊休地が活用されている拠点があったが、今はなくなっている感じがする。</p> <p>○横浜市においては、ジャズフェスティバルなどの事例に見られるように、駅構内や民間ビルなど多様な場所での展開が進んでいる。場所の選定は横浜の大きな財産であり、公共空間や地域のランドマーク、学校など、誰もが知る場所を活用することで、表現の幅が広がる可能</p>

	<p>岡部委員長</p> <p>恵良</p> <p>六川委員 野口</p> <p>岡部委員長</p> <p>山家委員 野口</p> <p>六川委員 園田</p> <p>山家委員 黒澤課長</p> <p>山家委員</p> <p>木村委員</p>	<p>性があると感じている。</p> <p>○従来の自由な取組を除外する意図はない。そうした活動も評価できる指標や方針を、指標に限らず検討していきたい。</p> <p>○クリエイターがを見つけ出す場所には独自の価値がある。例えば、水辺での活動など、思いもよらない場所で成功する事例もある。場所への視点や発見力は、クリエイターが持つ重要な力であり、その能力を生かすことが創造的な展開につながると考える。</p> <p>○以前のBankARTいい例だった。</p> <p>○⑧のイにある「民設民営の拠点の数」については、現時点で定義が曖昧であるため、まずはどのような拠点を対象とするかを整理し、把握可能な形にしていきたいと考えている。特に、誰かが自由に使っているような場所であっても、光を当てて連携・可視化することで価値が生まれる可能性があるため、関係者と相談しながら定義づけを進めていきたい。</p> <p>○民設民営の拠点の数も重要であるが、表現や活動に利用されている場所の数も評価すべき要素であると考えている。そうした場所の広がり、創造的な取組の実態を把握する上で有意義である。</p> <p>○民設拠点を具体的に言うと、BankARTか。</p> <p>○BankARTに加え、ACYによるフェロシップ助成を活用した郊外拠点が複数存在しており、中山のCo-coya、新横浜のARUNŌなど、既に興味深い活動を展開している拠点が現れている。こうした拠点に光を当て、より広く認知されるような取組ができれば望ましいと考える。</p> <p>○拠点運営を含めた市の予算はいくらか。</p> <p>○大体2億8,000万ぐらい。</p> <p>○③～⑥の市調査（電子申請システム）は、具体的にどんなものか。</p> <p>○拠点で実施するイベント等に参加いただく方には、QRコードを通じて電子申請システムにアクセスし、回答していただく形式である。これにより、我々の側で自動的に集計が行われ、必要なデータを抽出することが可能となる。そのため、まずは拠点の担当者にご協力いただき、参加者にQRコードを提示してもらい、あるいは見せていただくという手法を取る予定である。</p> <p>○市民や来街者向けの手法として適していると考えている。実際、ヨルノヨのようなイベントでも同様の方法でアンケートを実施していた事例がある。</p> <p>○中期アウトカムの2番目の方向性は良いと考える。ただし、『創造的活動への参加が増加している』という点については、数値的に測定する必要性は理解するものの、拠点の人数や事業参加に直接ひもづけない形が望ましい。人口減少社会において単純な数量増加を目標とすると、キャパシティの制約から本質的価値が見えにくくなる可能</p>
--	---	---

		性がある。したがって、参加者数の増加が将来的に足かせとならない設計が必要である。
岡部委員長 黒澤課長		○承諾後、いつから結果が見えるのか。年度末か。
		○可能なものは今年度中にスタート地点を定めたい。ただし、短期で開始できるものと時間を要するものがあるため、今年度から来年度にかけて開始するスケジュールで進める。
恵良		○中期アウトカムは3～5年のスパンで設定されているが、その期間でどれほど変化があるかを見極める必要がある。人口変動を踏まえ、率と人数の両方を使い分けるべきである。以前、子どもの参加率を議論した際には、総人口を分母に置いて毎年チェックする方法を検討した。人口の変動を参考値として観測する手法も有効である。
岡部委員長 恵良		○要は割合で見るとということか。
		○割合も重要だが、全体の数字も大切である。全体の動きを参考にすれば議論が深まる。
岡部長 恵良		○全体が減っている中で減少しなければ、総体的には増加といえる。
		○自然増ではなく社会増によって分母が増える場合もある。両方を見ていく必要がある。
岡部長		○意見を踏まえ、トライアンドエラーで進める。一旦試行し、必要に応じて修正・再検討する。
黒澤課長		○⑨番のグリーン社会の実現の取扱いについて整理したい。
山家委員		○⑦に環境を入れる案もあるが、環境やインクルーシブ社会の実現は姿勢に関わるものであり、KPIとしてはなじまない。取組の有無を確認する形でよいのではないか。
岡部長		○⑦や⑨のKPIはプログラム数になっているが、姿勢を測る指標としては適切でない可能性がある。別の指標を検討すべきである。
岡部委員長		○昨日、BankARTの関係者と話した際、福祉とアート、企業、大学との連携を意識した取組を進めていると聞いた。特にみなとみらいでは大企業が多く、そうした連携を意識した活動は、この議論にも関係するのではないかと考える。
岡部長		○知っておきたい数字ではあるが、全体の姿勢を測る指標としては適切でない可能性がある。より大きな枠組みが必要かもしれない。
岡部委員長		○これはある意味誘導であり、企業とのつながりをどう構築するかを意識する必要がある。我々としても、意識してもらいたい点を整理し、文言を整えるべきである。
黒澤課長		○いただいた意見を踏まえ、評価シートの考え方を来年度に向けて整理する必要がある。KPIについては⑨を外し、連携プログラムはKPIとして残す。⑦と⑨を統合する形でアウトプットを整理する案を検討したい。
恵良		○現状でよいと思うが、GREEN×EXPO 2027の前後で状況が変わる可能

資 料	<ul style="list-style-type: none"> ① 次第 ② [資料1] 委員名簿 ③ [資料2] 前回議事録（令和7年5月30日開催分） ④ [資料3] 令和7年度事業報告シート（旧第一銀行横浜支店） ⑤ [資料4] 創造界限形成推進委員会での情報共有等について ⑥ [資料5] 創造界限形成事業の成果指標について ⑦ [資料6] 星川駅行政区画運営事業者公募結果 ⑧ [資料7] 星川駅行政区画運営事業者選考報告書 ⑨ [資料8] 象の鼻テラスの公募スケジュールについて
特記事項	